

京都における疏水の遣水的利用に関する研究

Landscape Planning Research on Traditional Canals in Kyoto

山田圭二郎*・中村良夫**・川崎雅史***・田中尚人****・本田剛久*****

by Keijiro YAMADA, Yoshio NAKAMURA, Masashi KAWASAKI, Naoto TANAKA and Takehisa HONDA

1. はじめに

京都では、平安京造営以来多くの人工河川が計画的につくられてきた。通常は水量が少なく、しかしひとたび豪雨となれば「暴れ川」とまで称され人々の生命さえ脅かす存在であった鴨川の水を利用し、何とか身近なところへその水を引き込もうと努力してきた。そうした努力から、伝統的な「遣水文化」が生み出された。

本研究では、京都の疏水を対象とし、河川本川とそこから取水する疏水（派川）との関係に着目して＜本川＞と＜派川＞との関係から見た疏水のネットワークの構造を明らかにすることを目的とする。「人を水に近づけよう」というこれまでの発想ではなく、自然に近い河川＜本川＞から取水し、段階的に水位を調節し安定化させながら、「人に水を近づけよう」とする水の利用法、「遣水的利用」法について考えるものである。それによって、＜本川＞、＜派川＞、更には＜人間＞を含めた全体的な河川の秩序についての考察が可能になると考える。

本研究では、賀茂川を本川とする明神川、高野川を本川とする泉川、鴨川を本川とするみそ・ぎ川・高瀬川、および琵琶湖疏水を対象とし、あらかじめ地図により平面的構造の概略を把握した後、現地調査とヒアリング調査による確認および細部の調査を行った。

2. ＜本川＞と＜派川＞との関係から見た疏水の構造と遣水的利用

(1) Case Study 1: 明神川・泉川

(a) 明神川

明神川は賀茂川より取水される。明神川の水位を調節する堰は全部で四つ存在する。これらによって段階的に水位が調節され安定化されながら、明神川は上賀茂神社境内（写真-1、写真-2）、社家町前（写真-3）を流れ、最終的には最も身近な空間である庭園の遣水として、川沿いに建ち並ぶ社家の屋敷内へ取り込まれる（写真-4）。

上賀茂神社境内のように、目的に応じて明神川から更に分流させ安定化させた水を利用する例も見られた（写真-2参照）。



写真-1 奈良の小川（＝明神川）



写真-2 分流を利用した遣水

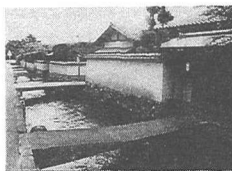


写真-3 社家町



写真-4 遣水利用

(b) 泉川

泉川は高野川から取水される。泉川の水位は、取水位置を除いて二段階の調節が行われている。第一段階は、高野川へ放流する水門によるもので、第二段階は琵琶湖疏水分線との平面交差により分流されるものである。水位調節された泉川は、下鴨神社境内の森を

Keywords: 景観、親水計画、空間整備・設計

- * 正会員 工修 京都大学大学院工学研究科
土木システム工学専攻
(〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-4788 FAX 075-753-4789)
- ** 正会員 工博 京都大学大学院工学研究科
土木システム工学専攻
- *** 正会員 工博 京都大学大学院工学研究科
環境地球工学専攻
- **** 学生員 工修 京都大学大学院工学研究科
環境地球工学専攻
- ***** 京都大学大学院工学研究科
環境地球工学専攻

明神川・泉川のネットワーク構造概念図を、図-1、図-2に示す。



(b) 高瀬川

図-3 みそぎ川・高瀬川構造概念図

(3) Case Study 3：琵琶湖疏水

ここでは、これまで明らかにされてこなかった庭園における遣水利用の段階に至るまでの琵琶湖疏水の水路網を詳細に調査し、接続の順序、利用の形態、幅員、位置などに差異のある四段階の流れに分類し、景観の特徴と共に整理した。

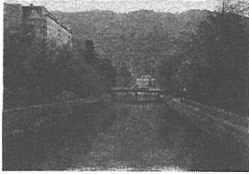


写真-9 本線の水路

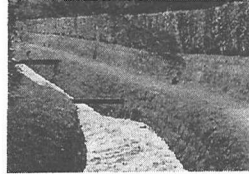


写真-10 支流の水路

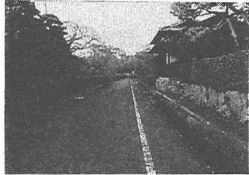


写真-11 まちの水路



写真-12 遣水

1) 本線の水路（幅員15m程度）：運河（写真-9）

形態および素材はほぼ直立の石積み護岸であり、風景の中でシャープな輪郭を与え、またオープンスペースの役割を果たすが、人が水を扱うための特別な要素は見当たらない。

2) 支流の水路（幅員2～4m程度）：琵琶湖疏水分線と扇ダム放水路（写真-10）

基本的には本線の水路と同様簡素な形態を持つが、遊歩道等が併設され、見る対象としての初期的なデザインが見られる。

3) まちの水路（幅員0.1～1m程度）：街路の側溝や家の境界を流れる水路（写真-11）

街路や寺院の参道などの小水路として景観の構成要素となり、身近な観賞と親水の役割を担っている。また、水の浄化への働きかけも見られた。

4) 遣水：庭園の中に導かれた人工の細流（写真-12）

庭園表現の主要な要素として人の側に最も近づいた段階であり、細やかな細部意匠が施され、細部のデザイン密度は高くなっている。

南禅寺周辺における琵琶湖疏水の水路網図を、図-4に示す。

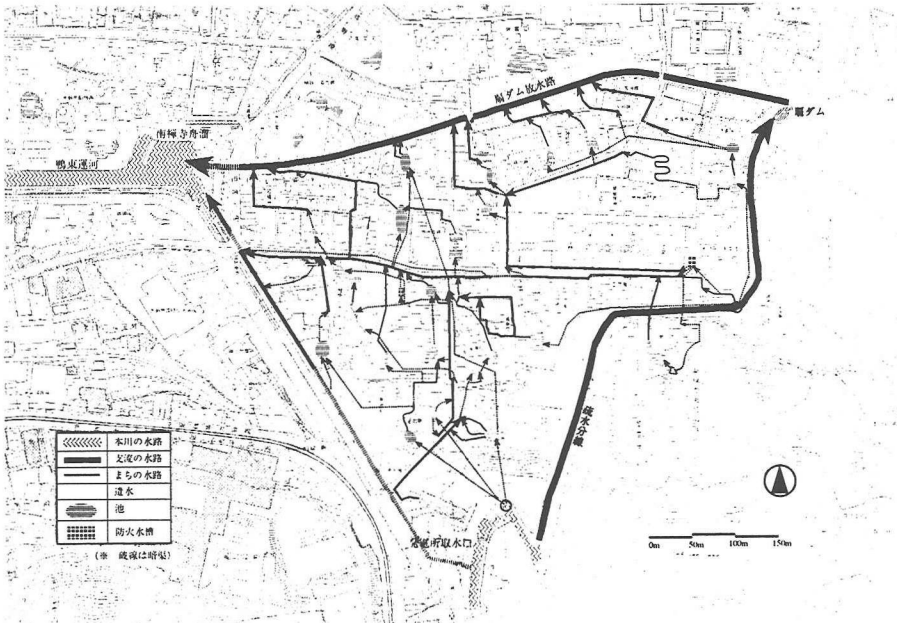


図-4 琵琶湖疏水水路網図

図-1～4に示されるように、＜本川＞と＜派川＞との関係から見た疏水のネットワークは、階層的な構造を持つことが確認された。

3. ＜人間－河川＞系における「間」の構造

これまでに得られた＜本川＞と＜派川＞から見たネットワークの階層構造を参考にしながら、その中心に＜人間＞の存在を置き、＜人間＞と＜河川＞との関係、その構造を考慮した総合的な河川のネットワークについて考えるための概念モデルを作成した。

その基礎概念として、人間の＜身体＞を基準とするその＜身体＞の延長としての空間、という考え方を導入した。

ここで、人間の身体を基準とした空間の区分と、それに対応する河川の区分とを以下のように設定した。

- 1) 家（屋内）⇔ 遣水
- 2) 庭（屋外）⇔ 遣水
- 3) 市街区内 ⇔ 水路
小・中河川
大河川（掘込河道有り）
- 4) 市街区外 ⇔ 大河川（堤防有り）

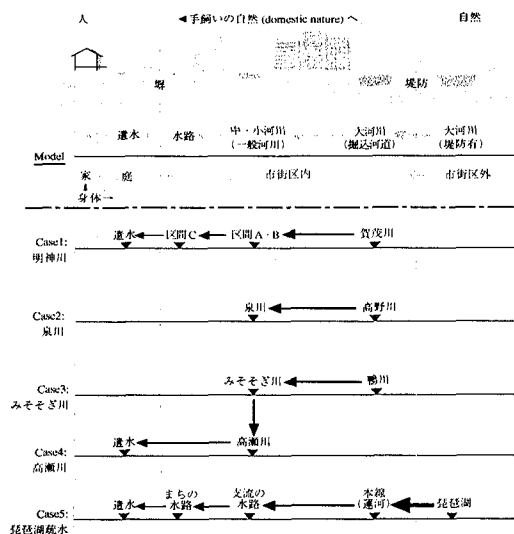


図-5 ＜人間－河川＞系の概念モデルとその適用例

ここでの前提として、人間の＜身体＞は最も身近な空間である家（屋内）に置くこととしている。

大河川から遣水に至るこれらの区分と並びとは、本研究で行ったケーススタディによって得られた＜本川－派川＞系の階層構造、「遣水化」の階層構造に対応している。

これにより、①本川から派川、遣水に至る階層構造における対象河川の位置付けと、②人間の身体の延長としての空間における対象河川の位置付け、という二つの側面から対象河川の総合的な位置付けを考えることができる。

作成したモデルとその適用例を、図-5に示した。

4. 結論

1) ＜本川＞と＜派川＞との関係から見た疏水のネットワークは、階層的な構造を持つことを確認した。このような階層的な構造は、水位を調節する機能の存在によって段階的に構成されているとすることができるが、そこにはまた、自然（wild nature）の水を可能な限りやわらげながら安定化させた水、人間によって飼い馴らされた水（domestic nature）を人の側に近づけようとする意図がある。

2) ＜人間－河川＞系における「間」の構造を考える基礎的な概念として、＜人間＞の身体を基準としたその延長としての空間、という考え方を導入し、人間を含めた河川の総合的なネットワークを把握するための概念的モデルを提示した。これを適用することにより、＜人間－河川＞系の総合的なネットワークにおける対象河川の位置づけを、ある程度明確にできると考えられる。

＜参考文献＞

- 中村良夫：遣り水文化の日本、RIVER FRONT Vol.30 pp5-6、財団法人リバーフロント整備センター、1997
 京都府土木建築部港湾課：鴨川の変遷、1958
 京都市建設局：京の水辺 山河襟帯処、1995
 毎日新聞社編：鴨川 生きている京の歴史、毎日新聞社、1959
 京都新聞社編：琵琶湖疏水の100年＜叙述編＞、京都市水道局、1990
 Tuan, Y／山本浩記：空間の経験、筑摩書房、1988